

緑のまきば

1975. 12

小金井緑町教会
 小 金 井 緑 町 教 会
 小金井市緑町四一六一三三
 電話〇四三三八一七九六一
 編集 牧師 山本圭一

説教

復活のあした 山本圭一

(マルコ16章1-8)

最初のイースターの朝早く、十字架につけられたイエスに香料を塗るため、女たちは墓に急いだ。真白な長い衣を着た若者が「十字架につけられたナザレのイエスはよみがえられた」と知らせた時、女たちはおののき恐れ、墓から出て逃げ去った。そして人には何も言わなかった。主の復活の朝そこに漂っていた恐れと不信は、何といぶかしく奇妙なことであろうか。このよみがえりのみ告げの中に「今から弟子たちとペテロの所へ行って、こう伝えなさい」(7節)ということばがある。これは「弟子たち、そして、ペテロにも」という意である。しかしペテロは三日前、大祭司の法廷で三度主イエスを否み、主に見つめられ、外に出て男泣きに泣いたではなかったか(ルカ22章61)。それ以来ペテ

ロの脳裡をゆききしたのは深い悔いの思いだった。主の苦しみが深くなればなるほど、自分の言った裏切りのことばに苦しんだ。主が十字架につけられたのも、自分のせいと思ったにちがいない。悔やみは果てしなく続き、何も信ずることができなくなっていた。自分はいうまでもなく、人から聞くこともみな信じられなかった。このペテロに、今、名ざして、「ペテロにも、知らせてやるように」と言われるのだ。主にかえりみられる資格など毛頭ないペテロが「ペテロにも」と名をあげて呼ばれている。復活の主はペテロを決して見捨てず、おもんばかり給う。ペテロにとって「そして、ペテロにも」という一句は、生涯忘れることのできぬものとなったにちがいない。

もともと、弟子たちは主の復活を主ご自身から予告されていた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきこと」を聞いていた(マルコ8章31)。しかし復活の朝、主の言葉を信じて墓に出かけた弟子はひとりもいなかった。墓に行った女たちも、主の体に香油を塗るためであり復活の主と会うためではなかった。ペテロにとって、主の復活は単なる奇跡ではなかった。奇跡としてだけであるならば、こんな不条理なことは決してあり得ないし、信ずべきものではなく、また信ずることもできないことであった。復活の朝、イエスの墓が空虚であったことが復活を証明するのではない。からの墓はイエスがよみがえられたあとの結果としての事実である。復活の出来事の内容こそ、主イエスが十字架の死により弟子たちのうちより取り去られ給うた後、死人のうちよりよみがえり、生けるものとして弟子たちに出会い給うたことである。ペテロを想うと、われわれは自分のことを思わないではおれない。

ペテロの名とともに、われわれひとりひとりの名があげられている。「そして私にも」「そしてあなたにも」ペテロの代りに自分の名を置いてみよう。復活の朝、ペテロのように疑い、惑い恐れているわれわれに主は、呼びかけ語り、近づき給う。そして、まもなくペテロは教会の重荷を荷い「わたしの小羊を養いなさい。そしてわたしに従ってきなさい」(ヨハネ21章15-19)と再び召されるのである。

一九七四年度 定期教会総会・告示

- 1. 一九七四年教勢報告並びに各部報告の件
 - 2. 一九七四年決算報告の件
 - 3. 伝道計画に関する件
 - 4. 一九七五年予算に関する件
 - 5. 長老選挙に関する件
 - 6. 教区・支区総会議員選出に関する件
 - 7. その他
- 教会員は祈りと責任をもって出席下さるようお願い致します。